

『沈黙行』

インターネットは、決して主人公にならない。
人は考え、人が動き、
その足跡として発信すべき何かが生まれる。

インターネットはあくまで
人生の小道具なのだ。

P/PEP BITS

「レイ・パスツール」 アルバート・エーデルフェルト



佐谷宣昭 Nobuaki Satani

1972年生まれ。九州大学工学部建築学科卒業。2000年九州大学大学院人間環境学専攻博士課程修了、博士（人間環境学）。翌月起業。株式会社パイブドビット社長CEO。明日の豊かな情報生活に貢献したいとの想いから、「情報資産の銀行」の必要性を説く。官公庁や都市銀行、小売業など10,096の事業者向けに情報資産プラットフォーム「スパイラル(R)」を提供中。

株式会社パイブドビット
東京都港区赤坂2丁目9番11号
03-5575-6601(代表) <http://www.pi-pe.co.jp/>

世界の信頼を勝ち取って欲しい。

JSCは7月23日に有識者会議を解散した。有識者会議とは一体何だったのだろうか。東京オリンピックの開催まで残された時間はわずか5年。過ぎたことを云々するのはオリンピックが終わってからの良い。この苦境を乗り越えて

「さ」を理由に選定したのであれば、自分が関与したのは「アイデア」の選定であってそれ以降は関係ないと言って逃げたりしないで、コストが掛かろうともチャレンジするべきだと発言して欲しかった。もっとも、「宇宙から舞い降りた：」程度の理由であれば、審査員が建築家である必要はなかったと思う。

いま日本の建築業界にプロジェクトマネジメント不在の問題が顕在化してきている。日本独自の総合請負（ゼネコン）文化の影響からか、オーナー自身が設計者や施工者や資材メーカーなどの業者を個別に選定して進捗管理する能力が不足している。他国に学び、オーナーの立場に立って業者をマネジメントする専門家を育成しなければならぬと思う。

JSCは建築の専門家ではない。だから建築の専門家たる建築家を有識者会議に招聘し、審査委員長に据えてデザイン案を審査したのだと思う。審査時に、「日本の技術力のチャレンジ」という精神、「宇宙から舞い降りたような斬新を無にするのに余りあるものだった。

どんな業界でも青写真を具現化する過程で工程や費用が変わることはあるだろうし、どんな計画でも賛成意見があれば反対意見もあるだろう。しかしながら、今回の一件はいただけない。7月16日に開かれた安藤忠雄氏（デザイン案の審査委員長）の記者会見は、建築を学んでいた学生時代に少なからず抱いていた同氏への敬意を無にするのに余りあるものだった。

7月17日、安倍首相が新国立競技場の建設計画の白紙化を表明した。この度の失態に何故か心が痛んだ。学生時代に建築を学んでいたからだろう。

『新国立競技場問題とプロジェクトマネジメント』